

NIPPON

かわら版

57号

日本製紙

発行所 東京都千代田区神田駿河台4丁目6番地 千101-0062 日本製紙株式会社新聞営業本部 電話 03-6665-1030 FAX 03-6665-0319 www.nipponpapergroup.com/newsprint@nipponpapergroup.com ©日本製紙株式会社2015



新春トップインタビュー

まのしろ ふみお
日本製紙株式会社 代表取締役社長 **馬城 文雄**

馬城文雄が社長として舵を取り始めてから半年が経ちました。2015年は新たな中期経営計画がスタートする重要な年となります。日本経済は脱デフレの方向に歩みを進めていますが、我々日本製紙も総合バイオマス企業への構造転換を加速していきます。構造転換の鍵を握る新規事業への構想、そしてその基盤として重要な「紙」の存在について語って頂きました。

インタビューアー かわら版NIPPON編集長 佐藤 貴光 杉山 貢治



年頭に当たり

新年おめでとうございます。日頃新聞社の皆様には大変お世話になっており、心より感謝申し上げます。昨年の社長就任後、多くの新聞社の皆様を訪問させて頂き、その際には温かい歓待を頂きました。今年も可能な限りお客様の元へ伺い、腹藏ない意見交換を通して、多くのことを学ばせて頂きたいと思っております。今年も何とぞよろしくお願い申し上げます。



社長就任後の半年を振り返って

率直な感想としては、社長業はやはりフィジカルが問われる職務だということに改めて実感しています(笑)。毎朝リフレッシュした状態で出社出来るよう従来以上に体調管理に気を遣っています。

経済状況全般としては、脱デフレの大きな流れは良い方向に進んでいると思います。しかし、消費税増税後の印刷用紙の需要減が思いの外大きくなり、これによって生ずる需給ギャップの解消に努めてきました。

また、足元の円安によるコストアップに対しては、

自助努力で最大限吸収しておりますが、頭の痛い問題です。リーディングカンパニーとして、再生産可能な市況の確保に努めたいと考えております。

2015年 経営における最重要ポイントは？

本年は、現在取りまとめ中の第5次中期経営計画がスタートします。印刷用紙需要を取り巻く環境は厳しく、需要の先細りは避けられないと考えています。当社は、現在海外・国内に持っている木質資源をさまざまな分野で余すことなく利用し、総合バイオマス企業への構造転換を図っていきます。紙の収益基盤につき足腰を鍛え直した上で、新たな事業をどう拡大し、構造転換を遂げるかが中軸的な課題と言えます。その課題の一つひとつを、スピード感を持って対応していくことが重要です。

新規事業の進捗は？

新規事業の柱となるエネルギー事業は、着々と歩を進めております。昨年2月に大竹で開始した太陽光発電に続き、八代のバイオマス発電、小松島の太陽光発電が今年営業運転を開始、また富士の火力発電設備も来年に営業運転に入る予定です。その他にも新たな発電事業を計画中であり、エネルギー分野を今後500億円規模の事業に育てていきたいと考えています。

バイオケミカル分野では、江津のバイオケミカルを中心に、勇払のセルロースパウダーや岩国のコー

ティング樹脂など、ケミカル事業本部が中心となって事業を展開しています。新素材として期待されるセルロースナノファイバーについては、岩国に年産30トンの設備を導入し、各企業へのサンプル提供を実施しています。用途開発を加速させ、早期に商業ベースの生産をスタートし、次の投資の具体的な計画に入りたいと考えております。

高齢化社会への対応として、ヘルスケア事業にも注力していきます。日本製紙クレシアが展開してきた、ポイズなどの吸水ケア用品や介護用品などを増産するべく、京都工場を中心に設備投資を着々と進めております。

そしてパッケージ分野も重要です。国際的な需要の広がりが見込める分野であり、今後石化系のビニール包装からの置き換えにも取り組んでいきます。この分野はユーザーの裾野が広く、さまざまな品種が使用されており、各営業部門間でユーザーを共有化することで、多くの販売機会の創出が見込めます。今後は部門間の連携を促進し、販売力を強化していきたいと考えています。

新聞用紙事業の展望について

新聞が文化の発展に貢献してきた役割はとて大きいと思います。諸外国と比べると、日本の新聞は国民生活に広く深く浸透しており、高い競争力を有する生産現場など日本の底力を創り上げてきたと言っても過言ではありません。

新聞社の皆様と共に歩むことで、我々の新聞用紙事業も文化の発展に貢献出来たと考えています。文化の発展とより良い暮らしに貢献することが我々の理念でもあるので、新聞用紙事業はそういった意味でも当社にとって重要です。

少子化や活字離れなどの難しい事業環境の中、大変な経営努力を続けておられる新聞社の皆様に心から敬意を表したいと思っております。新聞用紙においても需要の減少が今後も続くと思われませんが、我々も精一杯知恵を絞って、安定供給、安定品質という重大な責務を果たして参りたいと存じます。



見直される紙の機能

需要減少の一方で、機能の面から紙の存在が見直される事例も出て来ています。例えば、紙の社内報を廃止していたパナソニックでは、紙の社内報が復活しました。社内報を電子化したことで、読まなくなった社員が増え、理念やビジョンを社内に浸透させることが難しくなったことがその背景です。手元に置いて何度でも読み返すことが出来る紙が見直され、紙媒体の

社内報が復活したようです。

この例でもあるように、電子と紙はそれぞれ持っている機能が違います。また、古い技術が新しい技術に劣るとは限りません。それぞれで機能の本質を見つめることで、紙媒体が見直されていくのではないかと思います。機能面から、紙と電子の関係性を見ていくことも面白いのではないのでしょうか。

新聞営業部員への激励

私は、常にフェアであることがビジネスにおいて極めて重要であると考えています。課題を抱える場面もしばしばあると思いますが、お互いの立場を理解することが大切です。win-winの関係になるには、立場が違って日頃からお互いをリスペクトする信頼関係を築けている必要があります。このためにはきめ細かく顧客ニーズを把握し、工場への確にフィードバックするなど、日頃からやるべきことをやるのが大前提です。

現在多くの新聞社様と良好な関係を築けているのは、そのような体制を構築してきた新聞営業の力ゆえだと思います。この伝統を守り、お客様との信頼関係を紡ぐことが出来るよう、新たな人材の教育も大切にしたいと思っております。

第56回 九州・沖縄新聞用紙品質会議 安定品質・安定供給の必要性を再認識

56回目を迎えた「九州・沖縄新聞用紙品質会議」は、熊本市中央区に本社を構えられる熊本日日新聞社様にて開催、総勢38名が出席しました。冒頭に主催者を代表して八代工場長／内海より挨拶を行い、続いて幹事会社の熊本日日新聞社常務取締役／井手輝利様より、九州で30年以上続く品質会議が熊本で開催されることに対する敬意と感謝のお言葉と、新聞用紙の品質維持、改善には新聞社とメーカー双方が相携えることで成果が表れるのでぜひ本会議でも活発な意見交換をお願いしたいとのご挨拶を頂き、会議が始まりました。

危機管理の強化へ向け

まず当社新聞営業部長代理の谷口より「新聞用紙の原料事情について」と題し、近年の新聞発行部数や折り込みチラシの減少、更に中国での古紙輸入量の増加により日本国内での古紙回収



熊本日日新聞社
井手常務取締役

量が減少している実態と、古紙調達力を高める方法の一つとして新聞社と当社とでクロズドループリサイクル古紙回収を展開している実例を発表しました。本件について各新聞社様より多くの質問があり、改めて非常に高い関心を持たれていることがうかがえました。

次に八代工場と九州営業支社より、4年前の東日本大震災、一昨年11月の八代N2マシントラブルの教訓を踏まえ、今後の安定供給に向けた当社の対策内容として①八代工場での設備面の強化②デリバリー面で、当社は新聞用紙を生産している工場が4工場あるという強みを生かすため、今後他工場からのバックアップ品の納入テスト計画と各社への協力をお願いをしました。そして品質面では、従来からの課題である穴や見当ズレ対策の取り組み状況について工場より説明を行いました。

紙面検査器をヒントに品質向上へ

会議の後半では各印刷所に設置されている「紙面検査器」に焦点を当て、機械の性能(設定レベル)や欠陥の種類において何を重視されているかを各新聞社様より発表頂きました。当社八代工場では昨年11月に紙面検査器の更新工事を行いました。新聞社での紙面検査器の設定状況を確認することで、それを当社がどのよう



に生かせるのか参考に来ると考えました。品質向上への取り組みについて今までとは違った視点で各新聞社様と意見交換を行い、非常に有意義な会議となりました。

次回開催場所は長崎

今回は長崎県(幹事会社:長崎新聞社様)での開催を予定しています。ここまで回数を重ねられているのも各新聞社の皆様の多大なるご協力、ご支援によるものであり、感謝申し上げます。また品質会議の中で、改めて新聞発行には当社の安定品質と安定供給が必要不可欠であることを実感致しました。

最後となりますが、この度幹事会社としてご尽力頂きました熊本日日新聞社様に厚くお礼申し上げます。

開催日 / 2014年10月16日(木)~17日(金)
参加社 / (50音順) 大分合同新聞社、沖縄タイムス社、熊本日日新聞社、佐賀新聞社、長崎新聞社、南日本新聞社
(新聞社20名、当社18名 計38名)

第7回 東北・新潟新聞用紙品質会議 計画的な整備が安定稼働の基本

青森県八戸市にて開催

デーリー東北新聞社様を会場に、総勢46名により「第7回 東北・新潟新聞用紙品質会議」を開催しました。

会議は、石巻兼岩沼工場長／煙山の「東北に新聞用紙生産拠点を構える当社にとって、本会議は製品の品質向上はもちろんのこと地産地消の意識を高めるとい意味でも意義深いものと受けとめています。」という挨拶で開幕しました。続いて、幹事会社デーリー東北新聞社常務取締役／山本様より「製紙メーカーの皆様及び東北・新潟各新聞社のキーマンがこうして一堂に会することは大変貴重な機会です。ぜひ活発な情報交換を期待しています。」と激励のお言葉を頂戴しました。

新聞社及び当社からの発表

当社、新聞営業部長代理／谷口より「世界の新聞用紙事情と今後の課題」と題し、世界の紙需要減に伴う新聞・雑誌古紙の減少や、バイオマス発



デーリー東北新聞社
山本常務取締役

電の普及による将来の木材チップ使用増などで原料調達が困難となっている現状の説明がありました。そうした厳しい環境の中、当社の取り組みとして炭酸カルシウムの有効利用や軽量化による省資源処方、クロズドループ型古紙回収の展開などを挙げ、新聞社様への安定供給を継続していく決意を伝えました。

続いて、デーリー東北新聞社印刷部次長／夏堀様から「輪転機の安定稼働」をテーマに発表頂きました。東日本大震災時など過去の事例を基に当時の緊急対応やその後の危機管理体制について紹介がありました。「自然災害・突発事故は避けられないことであるが、それに備えた事前の情報収集や機械整備を計画的に行っていれば、事故・故障は最小限に抑えられる。」とコメントを頂き、当社も日々のメンテナンスの重要性を再認識することが出来ました。

その他、研究所から「新聞用紙の製造方法と最新技術」をテーマに当社の中性高品質新聞の特長として裏抜け防止技術向上のメカニズムを解説しました。また、岩沼工場の設備概要説明を動画で紹介したところ、お客様からのアンケートで工場見学の要望を頂き、工場の魅力を十分お伝えすることが出来たのではと思います。

ディスカッション

各新聞社様から当社製品(岩沼・北上)の使用状況報告では、今年もシワに関する品質要望を



多く頂きました。当社としては、用紙プロフィールから使用設備そして巻取の副資材まで品質安定化に取り組んでいることを報告し、理解を深めて頂きました。新聞社様は常に損紙率削減や作業負担軽減などの課題を抱えており、当社参加者もシワへの取り組みが重要だと改めて強く感じた次第であります。

最後に、幹事社をお引き受け頂いたデーリー東北新聞社様始め、ご参加頂きました各新聞社様の多大なるご協力に改めて感謝申し上げます。

今後も、開催を重ねることにより良い会議になる様、尽力して参りますので、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

開催日 / 2014年9月5日(金)
参加社 / (50音順) 秋田魁新報社、岩手日報社、河北新報社、デーリー東北新聞社、東奥日報社、新潟日報社、福島民友新聞社、ミノリ郡山工場、山形新聞社
(新聞社22名、当社24名 計46名)

かわら版 NIPPON 2014年を振り返る

KAWARABAN-NIPPON LOOK BACK 2014

1月

「第1回富士山紙フェア」に出展

「紙のまち富士市」を全国にアピールすることを目的に第1回富士山紙フェアを開催。当社富士工場・吉永工場、日本製紙クレシア興陽工場、日本製紙パピリア原田工場が共同出展し、富士山の貼り絵やメモ帳作り、水筆用紙の実演を行いました。



2月

「自然体感プログラム in丸沼高原スキー場」開催

平成25年10月に日本コカ・コーラ(株)と締結した森林資源及び水資源の保全・保護に関する中長期の協働活動協定に沿った第1弾企画。一般公募の家族など30名が参加しました。

3月

クレインズ「アジアリーグアイスホッケー 2013-2014」優勝

平成25年12月の「第81回全日本アイスホッケー選手権」優勝と合わせ7年ぶり2回目の2冠を達成した(リーグ優勝は5年ぶり4回目)。レギュラーシーズンは3位だったものの、上位チームを破り下克上となった。



4月

岩沼工場「クローズド・ループ型」古紙回収スタート



4月21日山形新聞社様と「古紙回収事業」に関する覚書を締結。読者サービスと資源リサイクル向上を目的とした本事業は東北地区で初の試みです。

5月

第62回全日本広告連盟名古屋大会にて「ポプカル新聞」を発行

既存のオフセット輪転機にインクジェットヘッドを搭載し、一部ごとに情報が異なるバリエーション印刷を可能としました。

6月

日本製紙(株)代表取締役社長に馬城文雄が就任

6月27日開催の株主総会にて代表取締役社長に馬城取締役、芳賀社長は代表取締役会長に就任。馬城社長は総合バイオマス企業としてバランスの取れた事業構成の実現を目指す所信を表明しました。

7月

「日本製紙ゼロテクノ東北有限責任事業組合」設立

コンクリート用混和材:高品質フライアッシュ「CfFA®」の生産・販売を開始。東北地方の震災復興の関連工事で、11月釜石山田道路工事に採用されました。

日本製紙株式会社 東北営業支社

日本製紙ゼロテクノ東北有限責任事業組合

8月

日本製紙物流(株)本社事務所を移転

東京都北区王子に本社事務所を構えていましたが、土地及び倉庫の売却に伴い埼玉県草加市に移転。1916年十条製紙十条工場として王子の地に開業し、1972年に十条倉庫が設立されるなど幾多の歴史を刻んできました。



9月

日本製紙クレインズの拠点「日本製紙アイスアリーナ」誕生

当社と釧路市は2014年9月1日から2016年3月31日まで、釧路アイスアリーナのネーミングライツを取得することで基本合意。これにより、アイスアリーナの名称は当社の社名を冠し「日本製紙アイスアリーナ」となりました。

10月

八代工場創立90周年を迎える

1924年10月15日 九州製紙(株)八代工場として操業を開始以来、節目の90周年を迎えました。平成に入り国内最大級の新聞用紙マシン稼働や木質バイオマス発電設置など近代化が進んでいます。

11月

日本製紙石巻工場の奇跡「紙つなげ!」ドラマ化

テレビ東京「池上彰のJAPANプロジェクト〜ニッポンの底力スペシャル」内で50分程度、寺脇康文さん、松村雄基さん、藤田朋子さんなどのキャストで放映されました。

12月

グリーン物流パートナーシップ会議特別賞を受賞

製品(紙)輸送のみに活用していたJRコンテナを、復荷で原材料(古紙)輸送でも活用することで「モーダルシフト・ラウンド輸送形態」を実現。トラックからJRコンテナへの切り替えによりCO₂排出量を削減したことが評価されました。

番外編

「クリネックス®ティッシュ」「スコッティ®ティッシュ」発売50周年迎える

日本のティッシュ元年は1964年(昭和39年)、アメリカ生まれの万能紙ハンカチとして普及していききました。



盛岡さんさ踊り 『サッコラチヨイワヤッセ!!』

東北営業支社 今野 良太郎

私の夏は、盛岡さんさ踊りに始まる。岩手県では学校行事とされる程、慣れ親しんだリズムだという。掛け声の「サッコラ」は「幸呼来」と書き、幸せは呼べば来るという意味。なんと響きの良い言葉だろう。この時期になると、リズムと掛け声が自動で脳内再生されるほど意識し、通年で数少ない…いや、唯一自分にスティックになれる祭りである。



祭りの基は藩政時代から受け継がれてきた地域ごとのさんさ踊りにあり、それぞれを集約した統合さんさのリズムに合わせて、踊り・笛・太鼓の列が盛岡市内の大通りを約1km練り歩く。まさに圧巻だ。更に第37回を迎えた今回は昨年8月1日(金)～4日(月)の4日間開催され、和太鼓演奏者数のギネス世界記録に返り咲いたという話題が人を呼び、参加数(256団体)・観客数(136.5万人)共に過去最多となった。

私が最もお伝えしたいのは、祭りの最終日を飾るにふさわしい太鼓パレードだ。前日までの太鼓演奏者数を超え、パレードは地鳴りのように街中響き渡る。一緒に参加した清水支社長代理とのやる気の相乗効果で、お互いの目は血走っていた。既にスタートした組を観覧すると、自分達もこの一員だと実感し、気分は更に高揚した。

太鼓を叩きながら踊り続けるパフォーマンスは、見た目以上に体力の消耗が激しく、本番中何度も心折れそうになるが、そんな最中、ふと青春時代



を思い出した。きっと、跳ねる度に飛び散ったすがすがしい汗のおかげだ。ゴールラインをまたげたのは、執念と言っても過言ではない。ゴール後の達成感と爽快感は経験したことが無く、恐れ多くも、この日ばかりは岩手県民になれた気がした。

祭りのあと、血走った目と折れ掛かった心に、あさ開(盛岡地酒)を流し込んだことは言うまでもなく、スティックにやり切った自分に酔うまでが、自己流の楽しみ方である。

さんさ踊りに出会って以降、私は「盛夏」を「盛岡の夏」と説く。

日本製紙石巻硬式野球部

祝！ 社会人野球日本選手権初出場！

関西営業支社 橋本 和仁



昨年の8月30日、当社石巻硬式野球部はついに悲願を達成しました。第40回社会人野球日本選手権東北最終予選第1代表決定戦で、七十七銀行に競り勝ち、東北第1代表として初の本戦出場権を手に入れました。

日本選手権は、都市対抗と並ぶ二大大会として1974年に始まり、今年40回目の節目を迎えました。夏

の都市対抗に対し、秋の日本選手権は補強制度がなく、単独チームでの日本一争奪戦となります。

10月1日に行われた組み合わせ抽選会の結果、日本製紙石巻の初戦は11月1日の大会第1日目第2試合に決まりました。対戦相手は近畿代表のニチダイ(京都府)。過去3度の日本選手権出場実績を誇る、経

験豊富な地元企業との対戦となりました。

11月1日、試合開始前の京セラドーム3塁側入口付近は、入場を待つ人々の熱気であふれ返っていました。関西地区の当社グループ会社のみならず、全国各地から社員が応援に駆け付け、また、たくさんの取引先の方々にご来場頂きました。7回裏の攻撃では、3塁側の3,000人近くの観客が総立ちになり、ダイナウェーブ・ブルーのタオルを頭上高く掲げ、「おお石巻」の歌に合わせて左右に動かしました。スタンド一面がまるで大海原のように青い波に揺れ、みんなの心が一つになる瞬間でした。

試合の方は、序盤に幾度となく日本製紙石巻の好プレーが光り、ペースを作っていたものの、3回の無死

2・3塁のチャンスを得点につなげられず、6回までは0対0。7回にニチダイに2点を先制され、その裏に1点を返すものの8回に追加点を許し、1対5で惜しくも敗れました。

当日は三連休の初日にもかかわらず、たくさんの取

引先、そしてグループ会社の方々にご来場、ご声援頂き、誠にありがとうございました。この場をお借りしてお礼申し上げます。関西地区の当社グループ社員一同、今年も地区予選を勝ち抜き、京セラドームで大いに活躍してくれることを期待しております。

